に始まり、住みよさの基準を探り、それを地区の中でデザインすることであり、地区カルテは、地区計画をどう進めるかが課題となってこそ存在するものであり

❹調査から地区カルテづくりへ

――〝中区民の意識と生活〟調査研究グループ

その項目設定は計画と密接に連がらなければならいであろうと考えている。

そして、当面、計画づくりの能力を持たない区における取り組みは、住民のぞむ、より住みよい地区への可能な繕いと建設を、住民とともに努力することであると考え、地区カルテを通じ現状や問題の把握とその打解の方向や処方箋の発見を、地域の専門家である住民参加で試みたいと考えている。

一――区別指標「わたしたちの中区」作成に際して

昨年六月、区別指標を作成する作業の中で、広く区役所職員の意見を聞いた。もっともその意見の集め方が区長→部長→課長会→係長会→職員というルートであったが。こういう上からの意見の聞き方に問題があったのであるが、何一つ有益なる意見が出されなかったのが実情であった。また区役所で独自な仕事を企画立案する場合、もっとも基本的な資料も不足していることを痛感した。

このことは、日常の業務の中で仕事が定型化されていることのほかに、本庁が企画立案し、区役所はその情報を地元に流す――地元説明のための根回しをする作業に関わるだけという構図が一般的に定着化していることによると思う。つまり区役所の役割りは、地元への情報伝達機構の一つの部分にしかすぎなく、また本庁のほうも、ある事業を行うために地元説明をしなければならなくなった時にだけ区役所を必要としたのであった。こうした日常性の中で、区で立案し、区の将来性を展望した、区の将来の方向付けを行う区別指標の策定を行うという仕事が与えられたとき、大部分の区職員が当惑したのも当然なことであった。

例えば、〝地域の特性〟ということで区内をいくつかのブロックに分けて説明しなければならなくなったとき、何を基準に、いくつのブロックに分け、どこへ線引きすべきか、その合理的な基準が皆目わからなかった。日常の業務の中で、漠然と山手トンネルをはさんで北と南、つまり関内地区と山手、本牧方面とでは異質なものを含むことはわかるが、何がどのように異なるのか明確な基準となるようなものは何も手元になかったのである。

このように、〝区別指標の策定〟の作業の過程の中で、われわれは次の二点について認識せざるをえなかったのである。一つは、区独自の手持資料の不足。それぞれの職場で、それなりの地元との連絡網は有している。税務課・市民課・統計係等それぞれ日常業務の中で地元と接触している中で、資料はそれなりに集積はしていたが、それがけっして生きた資料として使えるものにはなっていなかったのである。二つは職員の意識面での欠落である。これまでの仕事が本庁の下請であり、区役所は、地元民と接触をはかる機能しか有しなかった。そのため、問題点を新たに提起したり、新たに企画しそれを試みるという姿勢が失われていったのである。

二――職員参加による課題研究

以上のような反省をもとに、われわれ区職員の間に、区内をもう少し見直してみよう、少なくとも直接の仕事を離れて中区を見直そうという気運が盛り上った。そこで我々は職員間で一つの目標を定め、集まって討議することにした。グループの出発にあたりわれわれは二つの点を確認した。

一つは形式面であるが、区役所職員が自然発生的に集まり、自分たちの好きなテーマについて、自由に討議し、一つの目標を定め、企画・立案・作業を進めること。庁内のいかなる職場にいる人も参加でき、上司からの職務命令形式で参加するのではなく、各人の自発的参加によること。

二つは内容面であるが、テーマや問題点・調査方法等について、われわれの討

議により自由に掘り起していくこと。専門家の意見や、上司の命令により内容的には拘束されることはないこと。

このようにこの集まりは、職員が自発的に参加し、日常の業務を離れて、自分の仕事の場である中区を自己の問題意識をもって見直そうということである。この結果「地域課題の基礎調査」というテーマを自主選定し作業にとりかかった。遠まわりになるかもしれないが、このような職員の自発的討議による作業を最後まで継続していくことにしている。試行錯誤こそわれわれに与えられた最良の方法である。

三――地域課題の基礎調査の必要性

中区というトータル概念ではなく、その対象をさらに細分化し、地域の課題を整理し、地域の状況等地域別の基礎指標を作成すること。他都市での新たな調査研究のレポートにも刺激されたことも事実である。高知市の三里地区、武蔵野市の研究レポートなど。とくに現時点で中区において調査を行う必要性は次の点にある。

①都心部であること――周辺区での意識調査等は本市でも試みられたことがあるが、都心部で調査を試みるのは初めてであること。従って、例えば地域集団から機能集団への帰属形態の変化についても調査できるのではないか。

②港の玄関口として――〝みなとヨコハマ〟という場合、その港町の気風をもっとも受継いできているのが中区民ではないだろうか。港というのは人々の意識にどのようなイメージを与えているのであろうか。

③多様性に富んでいること――業務・住宅・商業地区がそれぞれ存在していること。

④歴史性――古くからの旧五カ村の合併とか関内地区の埋立によって生れた町、それぞれ、そこに住む人々に、意識面での継続性は残っているだろうか。

⑤本牧接収地――接収という事実が今もって続いていることは人々にどのような影響を与えているのであろうか。

⑥都心の整備――最近、都心の整備が進み、日々都心の様相が変っていくのであるが、市民の日常生活にどのような影響を与えうるのであろうか。

四――基礎調査の方法と内容

①方法――課題研究を取組む場合の手法として次の点を確認した。

・グループで調査項目・手法等についてお互いの討論によってその都度決定し

表―1　生活環境の何を図表化するか

①行政機関施設分布図	市・区役所、保健所、消防署税務署、公共職業安定所など
②―1 公園	公園の区域を緑で示す。計画中のものも含む
②―2 遊び場	
③医療施設	病院、一般診療所、歯科
④学校・学区	小学校～大学
⑤保育園・幼稚園	
⑥教育・文化施設	博物館、ギャラリー、センター
⑦ホール・集会施設	
⑧警察・司法	警察署、交番、裁判所など
⑨体育施設	
⑩郵便局	局の位置、半径…mの範囲、郵便切手販売所
⑪郵便ポスト	赤ポスト、青ポスト、半径…mの範囲
⑫公衆電話	赤電話、青電話（公衆ボックス）、黄電話（百円王使用可）
⑬ごみ収集区	
⑭広域避難場所	
⑮危険物貯蔵所	ガソリンスタンド、燃料貯蔵取扱所
⑯鉄道、バス路線・停留所	
⑰交通事故	1年間の発生地点（死亡・重軽傷別）
⑱―1 交通規制	一方通行、歩行者用道路
⑱―2 交通量	
⑲メッシュ別人口分布	250m四方の区域に分け人口密度をみる
⑳集合住宅	高層団地、マンション、アパートなど
㉑公道・私道	
㉒―1 公衆浴場	
㉒―2 床屋	
㉓接収地	
㉔都市計画図	再開発、計画道路等
㉕用途地域図	
㉖町内会関係	町内会区域、町内会館等
㉗神社、仏閣等	
㉘地価	

お互いに啓発し深めていくこと。
・専門家に頼らないこと。
・たんにアンケートの手法だけによらないこと。
・一年間で完結させるものではなく、将来にわたって継続していくこと。
・地域の協力を得ること。

②内容――地域課題を整理する場合、次の二本の柱による。

ア、生活環境調査

区民の生活から見た都市施設・地域施設等という視点で、できるだけ客観的な指標を探る。それを地図に落し、ないしは図表化することによって、ある地域における都市施設・地域施設等の集積状況を把握し、都市生活の成熟を計る。

イ、意識調査

意識調査をする場合、面的アプローチをするか（例、ある地域の人と他の地域の人々の意識の差異）、事項別アプローチをするか（例、教育・福祉・買物等）また、これを組合せによって行うか、現在検討中。この場合、パーソントリップ調査も取り入れる（例、上台公設市場へどこから人々が集まるか等）。

五――今後のスケジュール

現在までに生活環境調査の項目を三四項目拾いだした。意識調査について何を調査項目とするか、またどの地域を調査対象とするのか、グループで検討中である。

今後の予定として図―1のようなスケジュールを予定している。

●「〃中区民の意識と生活〃調査・研究グループ」構成員▽竹内文雄＝選挙統計係▽安田仁＝同▽内田四郎＝同▽奥津伸昭＝庶務係▽稲垣晴彦＝同▽早川和彦＝保護課事務係▽田島弘之＝登録係▽御園隆雄＝土地係▽須田俊男＝家屋償却資産係▽木村直人＝市民税第一係▽志賀象二＝市民税第二係▽高柳実＝調整係▽古川邦雄＝同

図―1　今後の予定

53―2　調査項目のひろいだし
3　調査項目の選別
＜環境調査＞　＜意識調査＞
4　調査方法の確定　調査方法の検討
7　表記方法の検討　調査の実施
9　作業　調査結果の解析
12　まとめ
54―2　地域基礎指標等の資料作成

表―2　意識構造

区分	具体的内容
居住地への愛着観（ふるさと意識）	①地の家系、先祖代々引継がれている ②本牧第五地区―本牧元町― ③神社仏閣の祭礼区域（町内会区域との関係） ④間門・根岸地区の埋立前と埋立後の意識の変容 ⑤旧宅地分譲地居住者（本牧満坂）の意識 ⑥マンション居住者（旭台・滝之上商業地域）の意識 ⑦定住性
寿地区	○寿地区の内部及び外部からの意識
行政への関心	①公共施設への関心 ②市政・区政への関心
接収地	①本牧接収地への関心（接収前と接収後） ②根岸住宅地区への関心
山手地区	○山手地区居住者の階層意識
観光地への関心	○中区民及び外来者から見た区内観光地への評価、外人墓地、港の見える丘公園、元町、三溪園
中区への通勤者	①関内業務地区通勤者と商業地区通勤者の意識調査 ②錦町工業団地
地域生活	①隣近所とのつきあい ②地域活動
自営業者	①間門地区の中小貿易業者、中小製造業者の意識 ②野毛地区の飲食業経営者の意識構造 ③関内地区の飲食業経営者の意識構造
商店街	

表―3　生活環境

区分	具体的内容
公共施設	①公用物と公共用物の分布 ②公園の利用形態
公益施設	○公衆浴場
商店街	①上台市場へ集まる人々 ②元町と伊勢佐木町
その他	①昼と夜との人口移動実態 ②交通量 ③物資の流れ